

GR
白雲山

とりお



43

埼玉、名栗、宗教法人
昭和53年10月1日 白雲山 鳥居観音

表紙の説明

紅葉と玄奘三蔵塔の一部

玄奘三蔵法師靈骨塔

昭和35年落慶 高さ33m

紅葉は樹令を増す毎にうつくしくなって

10月下旬から11月末までうつくしい

とりゐ第43号目次

裏表紙	秋の行事案内と案内図						
鳥居観音だより	……………	十五					
田舎医者	(其二十三)	見川鯛山	……………	十二			
西遊記	(其三十六)	岡部千三	……………	九			
観音行の 実践		光山善雄	……………	六			
道光禪師御法話	(其二十五)	……………		三			
大本山と鳥居観音		杉浦英文	……………	一			
表紙	玄奘三蔵塔と紅葉説明						

大本山と鳥居観音

曹洞宗大本山総持寺

監院 杉浦 英文

数多い色々な仏さまの中で、観音信仰はどアジア全域に広まったものはないし、又今日の日本に於て、観音さまほど信仰の対象として、一般民衆の心のよりどころになっているものもありません。

観音さまは、正しくは観世音菩薩と申しますが、そのお名前の示す通り、人々の悩み苦しむ音声を観ぜられて、たちどころに救済のみ手を差し延べて下さるといふ仏さまです。そして救わないではおれないと云う慈悲深いお心から、求める千差万別の人々のために三十三に身を変えて現われると経文に説かれています。

そのことを六観音、七観音、三十三観音とか申しますが、一般のお寺や丘に祀つられる仏像は殆んどが、聖観音さまとか、十一面観音、千手観音さまなどで、三十三観音など滅多に拝むことはできません

が、埼玉県名栗村の鳥居観音には七観音が本堂に、又山頂の大観音には三十三観音が祀つられています。こんな身近なところに、こうした稀な仏像が拝まれるということは、ほんとうにもったいない、ありがたいことでもあります。しかもこのお寺の仏像は全部が、創立された開祖平沼さん自から刻まれたもので日本寺院の歴史にみられない貴重なことであります。前々からのご因縁をうかがって、その信心の篤いことに頭のさがることであります。

平沼さんには大本山総持寺の埼玉県の信徒総代をお願いし、お世話いただいておりますが、鳥居観音のご本尊さまの入仏開眼の時から、三蔵塔や、玉華門の建立時、山頂の大観音の入仏式など、凡て大本山の禪師さまのご親修で行われたもので、私も幾度か、こうした行事の際禪師さまにお伴したことでし

た。このように大本山との間に深い関係が結ばれたことも、凡て観音さまのお導きであると思えてしかたないことであります。

大本山総持寺ご開山太祖さまのご生誕が、お子に恵まれなかった母親の観音さまへの祈請によって、授けられたものと伝えられ、八才で出家された太祖さまは、爾来一途に観音さまを信仰され、修行されお悟りをひらかれての後、観音堂を建てられて、亡き母上生涯の念持仏であった観音像をお祀りして、ご恩をしのばれたことでした。

平沼さんも、観音信仰の篤かった母上の遺志をつがれて、鳥居観音を建立され、仏像を刻まれ母上の菩提をとむらわれる。

時のへだてを超えて、観音信奉によるご因縁でございます。

今日曹洞宗は日本第一の大宗門となりました。鳥居観音も、関東での屈指の霊場として、目を逐いよいよ旺かんでありますこと、まことに敬けんな観音信心の化現でございます。

台 掌

昭和四十六年十一月十一日 山頂救世大観音の落慶開眼式に大本山総持寺から、岩本禪師貌下のご来山を仰ぎ、ご親修いただきました。



大観音入仏開眼法要

中央 禪師貌下

その後ろ 松浦監院老師



道光禪師
(故高階隴仙猊下)
御法話

(其の二十五)

禪の宗意から仏教を話す 前号より

真空と云うことばは科学でも使われておりますがそれとも意味がちがいます。なぜかと云うと、こういすべて形のある現象界は、これみな仮りのものです。ちょうど水そのものの本性はといえば、風さえあたらなければ鏡のようであるのが、水の本性であります。そのときには波の姿は全くないのであります。けれども、風という縁がくると、たちまち動いて波の姿があらわれます。そのようにすべての物質界は、真理の動いた現象であります。だが真理の本体の場合には、こういう姿が見えないから、そこを真空というのであります。

もう一度いとうと、空ということばは、真理の本体をいいあらわすことばであつて、ちょうど水の本性の

ままであるときは、波の姿は見えない。それがけきする縁にふれるとき、現象として波の姿が動いて見えるように、真理も、本体のときはなにも姿はみえないから、そこを「空」といいます。しかし空とはいいますが、真理はいつも動いて、万有界の現象を見せていますから、それを真空妙有といっています。これが仏教の空の説きかたであります。それでわれわれ人間の姿も、世界の姿も、みな空の現象する、すなわち真理の動いた姿であります。ゆえに現象界は、一切本来空というのであります。

それで、この「仏教世間編」の第一緒言のところに、こう書いてあります。

「仏教世間編は、世間に処して、得脱自在無碍清浄なることを、得んと欲せば、如何なる方法によるべきやを講究するにあり」と。

この「得脱自在無碍清浄」ということは、いま申した真理の本体であります。真空の境地に遊ぶことであります。前に申しました妄心の凡夫は、自己を中心として個人々々にかたまつて「おれが、おれが

の小さな範囲にしばらくられて、苦しんでいたのでありますから、自在無碍にはいきませんが、いったん真理の境地を達観すれば、真空無碍の自在を得られるから、そこを「得脱自在無碍清浄」というのです。いいかえれば、いまの凡夫の自我のとらわれをはなれて、仏心の境地に生きることです。すなわち、仏の世界を体得した境地、それが、

「得脱自在無碍清浄」ということであります。

「世間は複雑にして、千状万態なるをもって単純なる方法にて律すべきものにあらずと雖も、また自から其規律無きものに非ず、依て本篇は仏法と世法を融和し、これに処するの方法を記述す」と云つてあります。

そこで第二に、「空」ということの説明がしてあります。その文に、

「空は万物の本源にして、時々刻々に活動して事物を現わし来るものなり。故に空は断無又は断空の謂にあらざ。万物は悉く空より現じ来りたるものなるを以て亦終に空に帰す。故に万物は空と別物にあ

らずして同一のものなり。時々刻々に活動するに従つてその名と形を異にするのみ、たとえば天においては雲といい、地にとどまれば水と呼び、中間に流るれば雨又は雪というも、元来同一物なる流動体の形を異にするに従つてその名を變ずるが如し。天地星辰、風雨、山川草木、人畜というもまたその本源は同一にして、空の活動によってなるものなるを以て空と別個のものにはあらざるなり」とあります。

その「空は万物の本源にして、時々刻々に活動して事物を現わし来るものなり」とある、これは真理の本性をいうものであります。前に申したように、真理そのままでは、波のない水の姿であり、そこを空といいます。けれども水が動いて、波の姿が見えたとき、これが空に対して有であります。般若心経では色といつてあります。すなわち万有の姿の見えることであります。ゆえに「時々刻々に活動して事物を現わし来るものなり」といっています。

したがって、いまいう空は「断無又は断空の謂にあらざ」というのであります。

ゆえに、つぎに「万物はことごとく、空より現われ来るものなるをもつて、又終に空に帰す。ゆえに空は万物と別物にあらずして同一のものなり」といつてあります。また、たとえてみると、ひとつの土の原料で、人形をつくり、牛をつくり、仏をつくるそれぞれの姿はちがうが、原料から云えば、ひとつものであるように、真理の本体から見れば次の文にいつてあるように「時々刻々に活動するにしがつて、その名と形を異にするのみ、たとえば天においては雲といひ、地に止まれば水と呼び、中間に流れば雨又は雪というも、元来同一物なる流動体の形を異にするに従つて、その名を變するが如し」とこれも文章のとおりであります。

雨あられ 雪や氷とへだつれど

とくればおなじ谷川の水

という歌があります。まったくそのとおりであります。すなわち、真理の本体にかえれば、みなひとつのものであり、ゆえにまたつぎに、

「天地星辰、風雨、山川草木、人畜というも、ま

たその本源は同一にして、空の活動によって、なるをもつて空と別個のものにあらざるなり」と申してあります。

ここに仏教の平等観があるのであります。だから世界のなかに住んでいる一切のものはもちろん、世界そのものも空からあらわれて、空にかえるものである。というのが仏教の説であります。

七

第三に「自己」を解決してある本に、

「自己も亦空の所現なり、故に本来空なるを以て生死あることなし、しかれども一度その形を現わす時は、眼耳鼻舌身意の為に、その本性をおおわれ、無明の心を以て本体となし、これを基礎として事物を判断するを以て、人体に執着し、色声香味触法に留任して常見に墮し、貪瞋痴の三毒と、財色食名睡の五欲とのために苦役せられて、遂に豁然たる自己の本性を夢想にだも見ることに能わざるに至れり、

(以下次号)

観音行の実践

兵庫 庫 泉

光山 善雄

五 合掌奉仕の生活を実践する

合掌とは手を合すこと「合掌向仏」と申しまして礼拝する姿であります。感謝の気持ちを表現するには必ず手を合せて礼拝いたします。これはいかなる宗教にもこの姿がありますから、世界の人類が合掌によって平和がつくられるのです。「平和の武器」が「合掌」なることを現代人は忘れております。道徳も宗教もこの拝み合うことによって、心と心が結び合うことが出来るのです。

フランスの哲学者ポールリシャール氏は日本の富士山を讚美して「富士山は大地より天に向つて合掌している」と申しました。日本人から聞くことのできない尊い金言ではないでしょうか。食前食後の合掌、これは是非実行していただきたい。

食物に感謝する姿です。又朝夕仏壇に灯火をあげて合掌することも必要で仏壇は家の飾りものではありません。社会に対し、国に対して奉仕をなすことが国家繁栄の基であります。心身を仏に捧げて下座修行を実践することは尊い菩薩行、即ち観音行であります。

六 心身の練成を実践する人間になる

刃物でも使用しなくては錆を生じます。人間の心身も練成を怠りますと「なまけて」しまいます。日朝は顔を洗ふ如く、日日練成を忘れてはなりません。日日掃除をする如く「洗除心垢」と心の垢を除くことは死の臨終までつとめねばなりません。それには希望と勇気がいります。

観音行は理想の人間像であり、これを六ヶ条に分けてお話をしました。これを仏教の六度に充当して見ますと、

- 一、愛情親切を与える人間になる。これ布施なり
- 二、規律正しい生活をする。これ持戒なり

三、忍耐心のある人間になる　これ忍辱なり
四、勤勞を樂しむ人間になる　これ精進なり
五、合掌奉仕の生活を実践する　これ禪定なり
六、心身の練成を実行する人間に、これ智慧なり
観音行の実践として、この六ヶ条は仏教の六度に
充当することができます。この六度は宗教、道德の
基本であり、如何なる教育も六度をはなれては理想
の人間は形成できません。

観音行を実践することにより「観音妙智の力、能く世間の苦を救う」ことになり「無垢清浄の光」によりて心の闇を破ることになりましょう。「衆生困厄を被むりて、無量の苦、身を逼るとも」観音さまの威神力により、お救い下さることでしょう。観音行の実践は合掌からであります。

第十八講　念彼観音力

私達の心中も平素は波のない大海原のようであり、ますが一度台風となると、貧欲、瞋恚、愚痴の荒波がさかまくのであります。その時に念彼観音力の信

仰に安住せば大波小波を乗りこえて「波浪も没する能わず」安住地を得ることが出来ましょう。須弥山とは高い山の意味もありますが、ここでは理積の上で味わって見ると「心の頂上」と思えます。高い山から悪人のために、突き落されても負傷一つせず虚空に住するとは観音さまを念ずるからであります。

○
お隣の家が新築出来るとそれをねたむ心、お隣の娘が良縁があるとそれをねたむ、お隣に倉が建つと腹が立つと申します。よろこんであげねばならないのに、その反対にくる人は愛情も親切もない人で、そんな人間が集合して生きているのかと思うと社会はゴミ捨て場のように思われます。

心が濁にごっているのは当然です。神聖なる大学が、一部暴力学生のため暴力団の巢と化し革命運動場となつては大学が何のためにあるのか、まさに学園が火の坑やちと化しつつかあるを思うと、心配です。あれよあれよと云っている間に火災は拡大して、手がつけられないことになります。この際

国家の力によって排除せなければ日本の将来はどうなることか、この火坑ひあなを変じて平和な地とすることが観音力であり、身を以って火災の防火にあたらなければなりません。

「或は悪人におはれて、金剛山よりだらくせんに彼の観音力を念ずれば、一毛をも損することあたはず、或は怨賊のかこみて、各刀を執りて、害を加ふるに値はんに、彼の観音の力を念ずれば、ことごとく即ち慈心を起さん。或は横難の苦にあい刑にのみ、寿終らんとせんに、彼の観音の力を念ずれば、刀尋いで段段に壊れん。或は枷鎖かきに囚禁しうきんせられて、手足に杻械ちうがいを被らんに、彼の観音の力を念ずれば、釈然として解脱することを得ん。呪詛じゆそ或は諸の毒薬に身を害せられんとする所の者も、彼の観音の力を念ずれば、還りて本人に著かん」

悪人におわれて、悪人とは煩惱の散乱心であります。金剛山より推し落されんに、彼の観音の力を念

いなば一毛をも損することはない。いかなる危険な場に直面しても、観音さまを念ずる人は一毛も損害を受けることはない。

楠正成は明極楚後禪師に帰依し、北条時宗は道元禪師に帰依し、伊達正宗は雲居禪師に帰依し心の指導を受けたと申します。

雲居禪師がある時盜賊にかこまれた時、お前にワシの持っているものは皆あげる、ワシの持物や生命をとることは雑作もないが、ワシの仏心をとることは出来ないぞ。盜賊は禪師の態度におそれ入ってにげて行きました。

「或は悪羅刹、毒竜、諸鬼等に遇はんに、彼の観音の力を念ずれば、時に悉く、敢て害せじ、もし悪獸の圍繞して、利き牙きば、爪ありて、怖る可きにも彼の観音の力を念ずれば、疾く無辺の方に走り去らん。蛇、及び蝮蝎の気毒、煙火の燃ゆる如からんに、彼の観音の力を念ずれば、声に尋いで、自ら去らん

(以下次号)



西遊記

(其の三六)

岡部千三

ばしょう扇

法師たちの旅はまたつづいた。一日も休みなく、そしてはてしもない。しかし、いってもいっても、天竺へ行くことはできなかつた。そのうえに、どうも氣候がおかしくなつた。夏がすぎて木の葉が黄色になり、時には霜がふるといふのに、毎日あつたのは体の調子もおかしくなる。

「お前達、おかしいとは思わなにかね。すずしくなるはずの秋だと云うのに、朝から晩までむうつとして、わたしたちは、このとおりの汗だくだ」と、白馬の上の三蔵法師は、汗で光る顔をぬぐいながら云つた。

「まったく、へんな氣候ですねえ、秋の次ぎに夏がくるなんて、きいたことはありません。これは秋

夏とでもいうのでしょうか。」

めずらしく、沙悟浄が、こんなことを云つた。道ばたに、一けんの家があつたので、悟空が近づいて中をのぞいて、

「こんにちは。ちよつとうかがいます。」と、声をかけると、ひとりの老人がでてきた。

「はいはい。なにかご用でしょうかな。」

「わたしたちは西へ旅をするのですが、このあつさにまいってしまいそうです。ここはなんというところですか、また、こんなにあつたのはどうしてでしょうか。」

「おお旅の方では、ご存じないのもごもっとも、ここは火炎山と云つて、一年中、こんなにあつたところですよ。まあ、わけをきいてください。六十里ほどこのさきに、その山がありますが、いつも火がもえつづけているために、このようにあつたのです。」

「なるほど、なるほど、それでわかりました。だが、すこしずつする方法はありませんかね」「ないことはありません」

老人は、むずかしい顔をした。

「鉄扇仙という仙人が持っているばしょう扇でおげば、火炎山の火が消えるという話をきいてはいるが、鉄扇仙にあうのは、むずかしいことではないな」

「それでもないさ。わしがいるからな」

悟空は、なんでもないことのように云った。

「おししようさま、ばしょう扇とかいううちわをちょっとかりにいつてまいります。」

仙人のすむという山を老人にきいて、悟空はきんと雲にのり、びゅうっととんで行った。

鉄扇仙のほら穴の門のところ、ひとりの木こりが、木を切っていた。悟空は、ひょこひょこと、その木こりのそばへちかづいていった。そして、

「おいおい、ちょっとときくが、鉄扇仙という仙人はいるかい。」

「いませんよ。」

きこりは、ふしぎそうな顔をしながら、悟空をながめて、

「むずめさんのらせつ女じよならおいででしょう、旅の人はござんじありますまいが、らせつ女は、牛ま王のおかみさんですよ。」

「へえ、そんなやつは知らないが、たいしたやつではあるまい。」

うなずいた悟空は、門にちかよると、どんどんとせきたてるように扉をたたいてさげんだ。

「おおい。齊天大聖孫悟空だ。ばしょう扇をかしてくれ。」

すると、門の中かららせつ女が、どなった。

「だいじな宝がかせますか。おかえり。まごまごしているよ、しょうちしないよ。」

「しょうちしないとはおもしろいね。じゃ、どうするのだ、首を切るなら、そら首を、足を切るならほら、足を、どこからでも切ってもらおうか」

悟空がからかったので、らせつ女は、ほんとうにおこってしまった。そして両手に剣をひらめかしてかけだし、悟空めがけて切りかかってきた。

「らんぼうな女だな。しかたがない。あいてにな

ろう」と、悟空は如意棒でらせつ女の剣をうけとめてたかかったが、うでにかけては、悟空のほうが、ずっと上のようだ、らせつ女は、だんだんおわれて足もとがあぶなくなった。

と、いきなりばしょう扇をとりだして、ぱっと、



悟空をあおいだ。すると、なんとというふしぎなことに、悟空のからだは、たちまち空へ吹きあげられ、くるりくるりと宙がえりをはじめた。その宙がえりが、ちょうど一晩つづいた。そしてどしーんとおちたのが、小さな山の上だった。

「あれれ。とんでもないところまで、ふっとんだものだ、この山には、れいきつ菩薩がおいでのはずだっけ。菩薩におめにかかって、ちえと力をかりるとしよう。」と、ふらふらしながら菩薩のところへいって、わけを話した。

「いくら悟空でも、ばしょう扇にはかなうまい。一あおぎで、八万三千里とばす力があるんだよ、らせつ女のところから五万里のここだとまることのできたのは、おまえが仙術を知っていたからであるうまず、よかった、おめでとう。」

「おめでたくはありません。わたしがいなくなつて、おもしろさまは、どうなると思います。」

「しんばいするな。これをもってまいれ。」と菩薩は、定風船ていふうせんという、風をとめる薬をくれた。



田舎医者(其の二十三) 見川鯛山

天皇陛下バンザーイ

前号より

「きれいだね」

陛下がかたわらの皇后様に云われた。

広野地の部落へかかると、道に沿って小さな流れがあり、清らかな流れの岸辺で、どこまでも、どこまでも紫のアヤメが満開だった。そして、その水が回す水車小屋にも道端の農家の軒先にも、緑に映えた美しい日の丸の旗があった。道は守子坂を登りきって二つにわかれ、左はそのまま那須温泉まで続き御用邸への道はそこから右へ小砂利をしきつめた林の中を通る。その林でしきりに郭公と、ほととぎすが鳴き、そのとき、左手の林の切れ目から、陛下はその家だけ国旗を立てていない小さな草ぶきの家を見た。それはほんの、つかの間の一べつではあった

が、陛下のあたたかな心のかた隅に、その悲しい貧しさが暗いかげをつくってしまった。

だが、もう次の瞬間、陛下の行列はいかめしい警戒にまもられながら御用邸の正門をくぐって行った。その貧しい草ぶきの小屋が、開拓の薄葉金三郎の小屋であった。彼はとくに六十を越してはいるがその年令には見えないつるつるした赤ら顔の男である。酔っぱらいで、ひねくれで、人づき合いがわるく、近所での評判はよくなかった。

金三郎は終戦後、病身のかみさんと満州を引き揚げ、この高原へ入植してきた。戦争でたった一人の息子に死なれ、弱いかみさんをかかえながらも、彼は血みどろで働き、高原のやせた石ころを耕していたのだった。だがそこからは、わずかばかりの芋

と、齒つ欠けの唐もろこしと、水気のないバサバサの大根だけがやつととれた。そして、半年も続く吹雪と氷の荒々しい冬は、シベリアの凍てついた季節風を休みなく高原へたたきつけて、彼が耕した火山灰の乾いた土を吹きとばし、そのあとに石ころと根っこだけの無惨な畑を残していくのだった。

何年かたつと、ついに金三郎のたくましい開拓魂がもろくもくずれていった。そして彼は日雇いの人夫となり、あるときは道路工夫となつてわずかな日銭をかせぎ、その乏しいかせぎで酒を買つて飲んだ。すると今度は、病身のかみさんが鍬を握つた。油気のない赤っ毛の髪が干からびた顔の上で乱れ、無口で、無表情なその疲れきつた女は、だらしなく着た着物のすそを地面に引きずりながら石ころ畑を耕し、冷たい風に咳き込んでいった。

だが、彼女はたいていは、じめじめした薄暗い小屋の中で、しけた重いふとんを頭からかぶつて一日じゅうねていた。すると金三郎が、かたわらの炉端でぬれたそだをいぶらせながら、酒に酔つて怒な

るのだった。

「この、くたばりアマめが!! おれが酒のんでっからつて、ふてくされるなァ、いかげんにしろ、ふん、おもしろくもねえくそ婆ァだ、てめえは!!」
と、彼が茶わんを投げつけると、かみさんの青白い顔はだまつたまま、そつと、ポロのふとんの中へかくれていった。そして金三郎は、もうどこへもやり場のない怒りを自分自身にたたきつけ、苦い涙をのみこんで泣いた。

「なんだって俺だちァ、いつになつても、こんなにみじめなんだ。俺ァ、俺だちァなんだつて、こんなに……」

げんこつで涙をこする金三郎の、そのうしろの板壁にすすけた額ぶちの写真があった。戦死したせがれ、陸軍上等兵薄葉金一の写真であった。

「ひひ、人の、だいじな一人むすこを、ハガキ一枚でかつつあらつていきやァがつて、戦車の下じきにして蛙みてえに殺しゃがつたんだ。この日本ちゅう国ァ、金一ァ、あんなに弱虫の、泣き虫野郎だつ

た。餓鬼のじぶんからなア、死ぬときア、なんぼか痛かったんべによろ、あの、泣き虫やろうはなア、ややくそのように金三郎がいうと、頭からかぶっていた綿のはみ出たポロポトンが、小さく、こきざみにゆれて、その中でかみさんが泣いていた。

その冬、かみさんのくすぶっていた結核が赤焔をあげて燃えひろがり、ある日、鮮やかな血を雪の上に吐いた。

私が往診すると、その苦しげな呼吸の中から彼女が云った。

「こんなにひどくなっちゃって先生、これじゃ、もう、とても駄目なんでしょうね？、このとおりやせちまって」

かみさんが平べったい胸を開けると、肋骨のごつごつした胸で二つの乳房が枯れた葉っぱのようにしなび、そのどっちの肺もくさりかかっていた。

「いいや、まだそんなにひどくはないぞ。いまのうちなら、まだまだ大丈夫だともさ。だけど、入院して、どんどん治療しないと駄目だな、早いほうが

いいなそれも」

私がいようと、かみさん頬のそげた顔が悲しくかけた。

「入院なんて、そんなことうちじゃあとても駄目な話だ、なア父ちゃん」

そのすいじゃくした顔を父ちゃんに向けて彼女がいったが、金三郎の酒に酔ったてらてらした赤ら顔はきこえぬふりをしながらそっぽを向いた。

「駄目って、なにが駄目なんだ？、なんにも駄目なことなんかないぞ。それに、第一そうしなけりゃあんたは死んじまうんだよ」

「でも、うちにア、ぜになんか、入院するぜになんか、一銭だってねえも……」

あきらめの顔が笑って、彼女が云った。

「ぜに？、ぜになら心配すんなよ。医療保護ってのがあるんだ、そのためにな。民生委員に話して、その手つづきをとれば、何年入院したって一銭もかかりアしないんだ」

私がいったら、突然、父ちゃんが……以下次号

鳥居観音だより

終った行事と参拝状況

○四月十日 つつじまつり開始、例年より気候がおくれた関係で、一番早い名物の花、三ッ葉つつじが三分咲き位となった。

参拝者のほとんどが、マイカーで入山さる。福生市の俳句同好者十数名が入山して自由題で、

沢山の作句があつて、庫裡の広間で披露された。

○四月十二日 観光バス三台、マイクロ五台で来山外、個人参拝で徒歩入山者も多かった。

○四月十五日 最高に暖かい日となる、花は七分咲きになり、参拝者も多くなつてにぎわつた。

江崎元堂先生、吉田健、松本光善諸氏も見えた。

○四月十六日 コロナ会の来山を始め多数の人出で山内いたる所で、休みながら花を觀賞された。

○四月二十二日 広瀬秀雄氏 願かけ観音前に浄財箱を奉納のため来山、当日設置す。

○四月二十六日 開祖平沼先生ご夫妻来山、

三信工業より開祖平沼先生銅像立像輸送車着す

妻倉氏外三名同道

○四月二十七日 入間郡三芳町中村恒男氏他五〇名

神奈川大和市柏木伊助氏他四五名来山

○五月三日 飯能市小川文雄様を始め、多数来山、

天候よく山内にぎわう

○五月四日 植村セツ様 平沼玉枝様の来山とその

他参拝者あり。

○五月五日 福生市今村あい子様他、子供の日なので最高の人出となる。

○五月六日 飯能市松坂金次郎氏外多数参拝あり山

内赤のつつじが見頃となる。

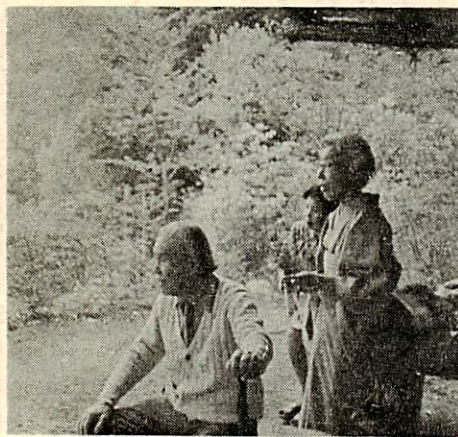
○五月八日 花まつり 例年通り本堂に於て善男、

善女の参拝を得て、花み堂に甘茶をささげ、花まつ

りを修行す。

○五月九日 観光バス二台、マイクロ三台で来山。

○五月十日 観光バス三台、名栗村一二三会の老人五〇名入山、初めて参拝の人もあってよろこばれた
 ○五月十一日 観光バス三台、マイクロ二台団体来山とりあ、四十二号武州印刷より入荷、直ちに発送
 ○五月十二日 開祖平沼先生ご夫妻と、参議院協会の三十五名様来山、バスで山内を探勝されながら、玄奘三蔵塔、救世大観音を参拝された。



見晴し台で眺められる平沼先生ご夫妻

ご一行は当山門前にある、観世音センターに入られて、昼食休けいされながら、白雲山の全景をながめ、すばらしい霊場だと口々に語り合っておられた。ご一行は三時バスの人となられ帰途につかれた。
 ○五月十四日 東京都瑞穂町の鈴木つる代様のご一行十六名様来山、日曜なので山内にぎわう。

○五月十五日 東京江古田老人クラブ会長保田様、引卒で二十五名様来山、山内巡拝、庫裡で休けい。

毎年来山されるので、寺務局でも心安く、ご一行は庫裡でゆっくり語り歌いなどされて、午後三時、同バスで帰途につかれた。

○五月十七日 月例法要、東京の江崎元堂先生ご夫妻来山、山内に参拝客多し。

○五月二十一日 清水の松田江畔先生ご一行八十三名がバス二台に分乗されて来山、山内参拝されてから観世音センターに一泊された。天気よくその他、東京の田辺様、細淵様、宮下様等来山。山内は人々にぎわった。

○五月二十二日 早朝より松田先生ご一行が、朝の

参拝をなさって、文庫、名栗窯などを見学されたり
庫裡では松田先生を中心に書道について雑談をまじ
えながら研修をされた。

ご一行のうち静岡の吉原から参加されたご婦人の
一人がゼンソクで毎日せきが出て苦しんでいるの
だが、昨日こちらへ来て数時間たったら、そのせき
がでなくなつて忘れたようになって、昨晩は一度も
出なかつたと申された。公害のない空気とみどりの
樹々の吐くオゾンが多いためと云うことに話は進ん
だ。

もう一人のご婦人は毎日眼が痛んでこまっていた
がこれまた、名栗へ来て、数時間たったら、その眼
の痛みがなくなつた、昨晩から今日は痛まないと
言われて、このようなところに住みたいと云われた。
清浄な空気は、緑の山と、きれいな水によつてつ
くられることが、このお二人の話で証明された。

松田先生ご一行はそれら公害になやまれるご婦人
もバスに分乗されて、又のご来山をたのしみに元氣
に帰途につかれた。

○五月二十八日 開祖平沼先生銅像建立協賛申込の
第一号、扱人鳥居観音講埼玉トヨベツト講
講元（副社長）梶谷真一様 五五一名分、受付、



講元トヨベツト講 梶谷真一様

直ちに用意
の礼状の発
送に着手、
紅のつつじ
も終りをつ
げて、山内
の青葉は益
々みどりこ
く、空気も
風も味があ
る季節とな
つた。

この日も
参拝者多く

汗ばみながら、緑の樹々の間の道を上り下りする人
のすがたは皆たくましかった。

○五月三十一日 開祖平沼先生ご夫妻来山、

事務局一同に昼食をご持参されて、皆一緒に庫裡の広間でごちそうになった。先生ご夫妻は、

「こうして皆と一緒に食べることが、たのしみなのだよ」と云われて、みなたのしくいただいた。

ご夫妻は月に一度はおいでになって、山内参拝の後、観音様をより一そう発展させるためのご指導をされ、一安心してお帰りになった。

○六月三日 広瀬電機社長広瀬秀雄様、滝田様等多数来山、バス三台、マイクロー一台

○六月六日 東京練馬区教育委員会主催レク一行来山、一五〇名入山

○六月八日 東京、郡司様、鈴木様来山他多数

○六月九日 日丸産業KKより銅像申し込受付

○六月十一日 入間市、原様始め、東京六本木、写真クラブ十名入山、狹山市六本木様来山

観光三台

○六月十三日 八王子市、信松院住職西村様外十二名様来山 他多数入山

○六月十四日 銅像協賛、矢島武久様、赤須文也様受付

○六月十五日 銅像協賛、片倉チッカリン様、寺尾様受付

○六月十六日 江戸川老人クラブ五五人来山の外多数入山、梅雨と云うのに最高温度となる三十三度

○六月二十一日 植村セツ様来山

埼玉トヨベツト講元様扱、銅像申込三八四名受付
○六月二十三日 午前十時当山役員会開催、

平沼、武居両監事、責任役員 平沼、有馬、尾尻

岡部出席、昭和五十二年監査報告、事業報告、昭和五十三年度、事業計画、予算審議、承認決定午後三時散解す。

当日は吉島会計事務所長説明のため来山。

○六月二十五日 銅像協賛、埼玉トヨベツト様、並に埼玉トヨベツト講、等受付

○六月二十七日 川越市山崎嘉七様の銅像協賛受付
宮岡伴吉、喜代永政雄、原田愛助、新井もと各位より受付

○七月一日 川越市 新友講元齊藤様より流灯法要
計画につき紹介ありて、計画の報告をなす。

○七月三日 開祖平沼先生来山、昼食を馳走して下
さる。救世観音、本堂参拝、後あじさい園を一巡さ
れてお帰りになる。

○七月四日 飯能護念講元横川さん来山

○七月五日 東京児玉様流灯申込 日高、齊藤様、
小田様来山

○七月六日 吉田健様外塔婆供養申込受付

観光三台、自由参拝多数

○七月八日 銅像協賛 埼玉トヨベツト講二四八名
江崎元堂、阿部信雄、宮原芳子、トヨタ自動車各位
受付

塔婆供養 江崎、原田、若林の各位受付

○七月九日 銅像協賛 齊藤新作、小川亀太郎各位
受付、塔婆供養 宮田留吉 齊藤新作 各位受付

岡部責任役員、吉祥寺観音四万六千日供養参列

○七月十一日 塔婆供養 本村その様外受付

流灯供養 寺尾長吉 清野福松 三宮菊枝、渡辺

綱雄、武石武夫、石毛銀一各位受付

○七月十三日 塔婆供養 原 進、広瀬秀雄、馬場
昭一郎、滝田トキ、岡部千三各位受付

流灯供養 原 進、小谷憲成各位受付

○七月十四日 銅像協賛 野本栄治様申込受付
塔婆供養 小山権之丞様申込受付

○七月十五日 流灯供養 山本すみ代、山崎完、高
橋節子、小田徳一、倉田照子、吉田健各位受付

明日の塔婆供養の準備完了

○七月十六日 日曜なので朝から入山者も多く、午
後二時より救世大観音堂内で、尾尻老師導師によつ
て修行、数百本の塔婆供養は荘ごんで、入山者も
静しゆくに参拝された。

○七月十九日 中里勇吉様から銅像協賛申込あり。

岡部千三、清水市の松田江畔先生まで、文庫に納
めてある、江畔先生の作品、経巻五卷箱入持参す。

○七月二十一日 夏休みになって名栗川へ来る人達
が次第に多くなって、入山者も多くなって来た。山
の空気の味が何とも云えないと云っていた。

○七月二十五日、各方面から流灯の申込があった。毎日暑い日が続いて名栗川へ涼を求める人が引きを切らさない。雨がほしいこの頃である。

○八月二日 埼玉トヨベツト(株)から流灯法要一括お申し込あり。

○八月十三日
名栗の盆が始まる。平沼先生、ご来山、

施餓鬼、迎え火等で心忙しい気分となる。

○八月十六日
流灯法要修行
流灯数千三百
午後四時本堂
法要に始まり
午後七時名栗



名栗川の流灯

川へ流灯された。参拝の各位は恒例と云った方達で親しみのある人達で、和やかに参列されたり、休けいされたり、ご自分で流灯された。

流灯が終る頃準備もおこたりになく仕掛火花がうち上げられて、五彩の火花は川面に又中天に咲き乱れて人々の目を圧した。それからの一時は火花に夜空はいろどられた。

その頃広場に組まれた、盆踊りのやぐらを囲んで老いも若きも、村内村外の人々が浴衣姿、その他いろいろの姿で数々の民謡をおどりまくった。

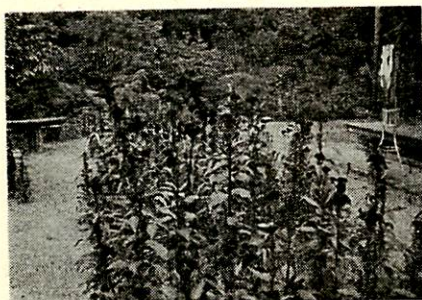
やぐらの上では例の東京仕込みの太鼓をたたかれる浅見さんが、田舎の盆として泊りに来られ、一生懸命パチさばきもうまくたたかれたので、一層盛り上がる。天候にめぐまれて、久しぶりに盛大な流灯法要ができた。

○八月二十日 名栗川の木かげと云う木かげには朝から涼を求めて、くり込む団体や家族づれが多く、その人々が、白雲山の大観音を参拝されるのも多くなつた。そして山を愛し樹木を愛されるのに感心した

○八月二十四日 埼玉県議会議員農林委員二十名様が、名栗の林業状況を視察のため来村、名栗の林相展望は白雲山の台地がよからうとのこと、案内は県農林部長、林務課長、村長、助役の方々に、山上から西川林業の現況を説明されたので、林業事情について認識を深められた後、白雲山の森林の美を採勝していた。

○九月二十四日 彼岸法要、外十一時から当山開基家及関係の物故役員諸氏の法要を謹修した。

秋もようやく深まってすがすがしい日となる



花のけいとうの中庭裡庫

これからの行事と諸計画

紅葉狩り

○十月二十五日から十一月二十五日まで、紅葉狩りの期間といたします。

当山の紅葉は毎年すばらしくなりました。色々な種類の楓が紅の濃淡を染め出して、一ヶ月にわたって山をかざります。

尚秋の草も様々にいどって山内はうつくしく、たのしくします。

秋季例大祭

○十一月十七日、紅葉も見頃と思われる。恒例の秋の大祭は秋色いよいよ深く皆様をおまちしています

十時三十分 本堂法要

十一時三十分 救世大観音法要

正午終了、山内紅葉探勝

大黒祭

○十二月十日、十時三十分 大黒殿 各自参拝、御縁つなぎと云って、五円護り袋さし上げます。

新年祈禱のご案内

○昭和五十四年一月一日午前十時御祈禱修行いたし
終了後、新年の初顔合せをいたし、お話を交わしな
がら、おせち料理などおすこしをいただきます。

新年祈禱清規は左の如くです

○祈禱料 一金壱千円、貳千円、参千円以上

○願意 家内安全、交通安全、諸願成就、

商売繁昌、試験合格、身上安全、

安産、等

○御申し込み期日 十二月二十五日

○御申し込み先 鳥居観音寺務局

○祈禱料払込先 埼玉銀行名栗支店

鳥居観音口座

又は直接寺務局へ

除夜の鐘

○十二月三十一日午後十一時五十分大鐘楼に参集い
ただいて、第二回除夜の鐘の修行をします。

講中の増強と拡大のお願い

すでに多数の講中を結成いただいておりますが、
講元様を始め役員各位が欠員となったままの講もあ
りまして、更新していただきまして会員数の増加と
講元様役員各位の組織を整えていただきますようお
ねがい申し上げます。

又新しく結成いただきます講につきましては、お
伺いしまして、ご協力を仰ぎたく思っております。

今後の講中の講費はご参拝の折に頂戴いたすよう
にします。

○団参、全員、講費五百円、祈禱札全員に

○代参、代参者講費五百円、祈禱札全員に

代参を何年かに分けて参拝最後満開す。

細かい規約にとらわれず、役員各位の計画によつ
て、団体参拝、代参方式によりまして、講員の親睦
を図りながら、信仰を高めていただきますようお願い
がい申し上げます。そして講員の皆様にはいつでも
気安く、庫裡でお休みいただければ幸いです。

開祖平沼先生の銅像建立について

本年五月、本計画の意図を表明しましたところ、各方面から広くご協賛いただき、更に意義を深くせられては、と云うことになりました。先般からその趣意書をおとどけいたしました。が、早速ご懇意をお示しいただいております。

白雲山 鳥居観音 開祖平沼先生銅像建立趣意書

昭和十五年奥武蔵名栗溪谷、鳥居の地、山腹の聖地に、平沼桐江先生が堂を建て、自から聖観音を彫み、御本尊としてお祀りされて以来、広大な寺領の奉納と共に、境内花木園、参道の整備を推進され、諸堂、塔の建立に加えて、大観音の像、外多数の仏像を彫祀され、今や寺歴四十年を経て、観音靈場として、日を逐い法輪の旺かんにありますことは、まことに歎びに堪えないとあります。

この事は偏に、平沼先生半世に亘る心魂を傾けられた善根のしからしむるものであります。その浄

業は齊しく人の敬仰の念を一にするものであります。この度このご聖業に対し、山内に先生の銅像を建立して、これを顕彰し、永く後世に伝えんと、関係者一同この企を発企した次第であります。

就ては四方有縁の方々のご協賛、ご支援を仰ぎたく、茲に趣意書をもちまして、お願い申し上げます。

計 画

- 一 銅 像 作業服で山内の手入れをされた当時の
お姿立像
- 一 像 型 総 高 三米八〇（像二、三米台座一、五〇米）
- 一 総 工 費 一、三五〇万円
- 一 完 成 十月末日（遅くれる予定）
- 一 協 賛 お 申 し 込 十月末日
- 一 協 賛 金 一口金一、〇〇〇円と以上何口でも
- 一 お 申 し 込 先 鳥居観音寺務局（電話〇四二九七
（九）〇四一七番）
- 一 お 払 い 込 先 埼玉銀行名栗支店銅像口座
（一二七七九）

昭和五十三年五月吉日

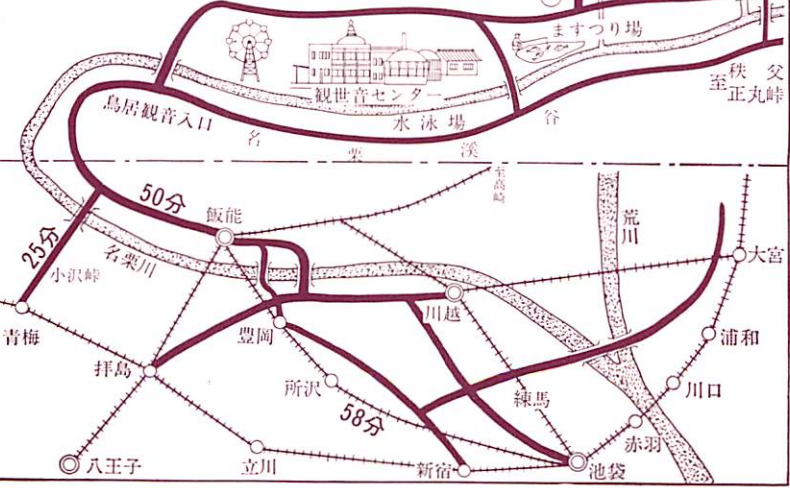
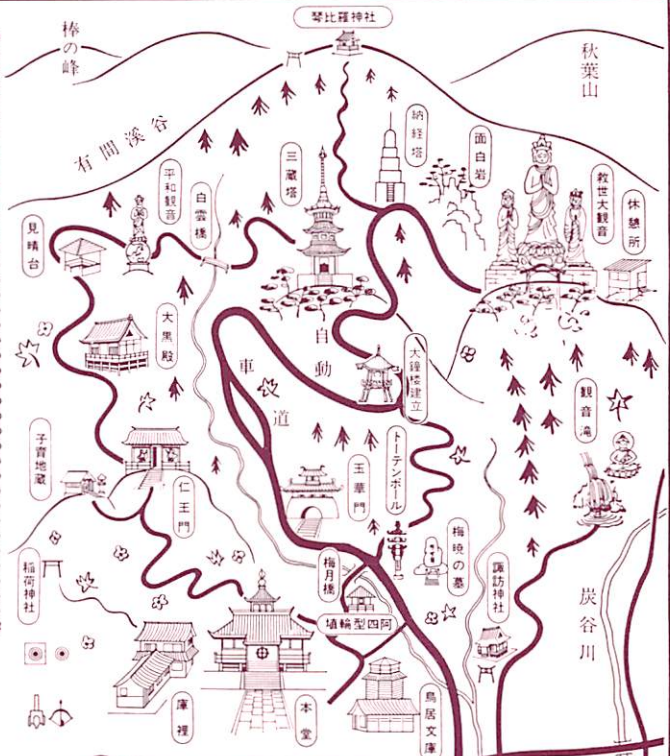
宗教法人 白雲山鳥居観音 役員一同

（お申し込みはおはがきご使用で

口数 ご芳名 ご住所を知らせて下さいませ）

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



秋の行事案内

- 紅葉狩り 10月25日～11月25日

緑と紅葉が全山に調和よく清浄な空気は格別です。

- 秋季例大祭 11月17日 10時30分

- 大黒祭 12月10日 10時30分

年末新年の行事

- 除夜の鐘 12月31日 午後11時50分

108の鐘をつく

- 新年祈禱 昭和54年1月1日～3日 10時

願 旨 家内安全 商売繁昌 交通安全

諸願成就 安 産 其 他

祈禱料 1,000円 2,000円 3,000円以上

御申込先 埼玉県入間郡名栗村

白雲山 鳥居観音

電話 04297-9-0417